

「家庭の日」「青少年を育む日」 啓発作品集（入賞作品）

青少年育成甲斐市民会議では、“毎月第1日曜日は「家庭の日」・毎月第3日曜日は「青少年を育む日」とし、これを多くの皆さんに知っていただき、家族揃って温かい心のふれあいを図ったり、地域での青少年の健全育成に積極的に関わっていただきたいと願っています。

この活動を広く普及させるため、市内小中学校の児童・生徒の皆さんへ「家庭の日」「青少年を育む日」のポスター・作文・標語による啓発作品の募集を行いました。

小中学校のご協力により、作文の部912点、ポスターの部1,340点、標語の部1,673点、総数3,925点と多数の応募をいただきました。作品は各学校での審査後、青少年育成甲斐市竜王・敷島・双葉地区民会議での審査を経て、青少年育成甲斐市民会議で審査を行い、青少年健全育成推進大会で表彰をしました。

各部門最優秀・優秀に選ばれた作品について、作品集としてまとめましたので、是非ご覧ください。

※受賞者名敬称略。一覧、作品掲載の順序は、賞名ごと、学校順、学年順、五十音順に記載しており、同一の賞のなかで順位付けしたものではありません。

作文の部 作品 小学校低学年

(作文は原文のまま掲載しています)

最優秀

「大切な家族の時間」

敷島南小学校 三年 前田 夏々帆

わたしは、5人家族です。お父さん・お母さん・お兄ちゃん・お姉ちゃん・わたしの5人です。いつも夕食は、ダイニングテーブルで5人ですわって食べていました。しかし、今年の4月からは4人になってしまい、1きやくのイスだけいつも誰もすわっていません。なぜなら、10才年上のお兄ちゃんは大学生になり4月から一人ぐらしを始めたからです。お兄ちゃんがいなくなり、夕食中みんなの口数がへり、とても静かになりました。お兄ちゃんがいた時は、みんながかわりばんこで話をしていて、話と話の間にしずかな時間は少しありませんでした。今は、あいたイスと静かにあいた時間がありとてもさびしい気持ちになります。この前、お兄ちゃんが久しぶりに家に帰ってきました。お母さんもお父さんもお姉ちゃんもとても明るくなり夕食の話も静かな時間がまったくない楽しい時間でした。今までは、ぜんぜん気が付かなかったけど、家族そろっている時間がこんなに楽しく幸せなんだと思いました。お兄ちゃんが帰ってしまい、また静かな夕食になってしまいました。それでも今は、わたしとお姉ちゃんです学校であった話や友だちの話、ユーチューブの話やアニメの話を今までいじょうにたくさん話すようになりました。

あたりまえだけど、ずっと続かないこの家族みんなでいる時間は今のわたしの宝物です。

幸せな時間をいつまでもわすれないようにいっぱい話していっぱいわらい合いたいと思います。今お姉ちゃんは高校2年生です。2年後にはお姉ちゃんも大学生になり家にはお父さんお母とわたしの3人になります。さびしいのはきっとわたしだけではなく、一人になるお兄ちゃんやお姉ちゃんも同じだし、赤ちゃんの時からずっといっしょなのに、少しずつ家族が家からいなくなってしまうお母さんやお父さんはもっとさびしいだろうなと思いました。

なので、今の家族みんなでいる時大切にしてお明るくて楽しい幸せいっぱい時間をたくさん作ろうと思います。夏休みには、家族で広島にいきました。広島では原ばくしりょう館にも行きました。せんそうがあつた時代にはいっしゅんで家族をなくした人たちがたくさんいたことを知りました。わたしが今あたりまえに家族といられることがどれだけ幸せなことなのかわかりました。そして、家族の大切さをもっと大切にしていきたいと心からつよく思いました。

優秀

「おじいちゃんとわたし」

玉幡小学校 三年 花輪 環那

私の家のとなりにはおじいちゃんとおばあちゃんが住んでいます。おじいちゃんは畑でたくさんの野さいを育てています。何を作っ

でもおいしくて、りっぱな野さいです。今の季節は毎朝新せんなキュウリ、トマト、オクラ、ナス、モロヘイヤ、ピーマンなどがとれるので、友達からとてもうらやましがられます。とてもおいしそうなえだ豆もとれるのですが、大豆アレルギーの私は食べれないのが残ねんです。

そんな元気なおじいちゃんですが、3年前の夏に「のうこうそく」で救急車で運ばれたことがあります。夜おそくだったのですが、おじいちゃんが心ばいで、なかなかねむれなかったです。おじいちゃんは早くに救急車をよんだので、軽いのうこうそくですみ、1週間の入院で帰ってこれました。が、今までおじいちゃんがあたりまえにやっていた畑しごとや、犬の散歩などがしばらくの間できなくなり家ぞくみんなで協力してやることに決めました。おばあちゃんは、犬の散歩、私はお父さんとお母さんと一緒に朝早めに起きて野さいの収かくの手伝いをやりました。いつも元気でいてくれたおじいちゃんが、急に病気になってしまい今まであたりまえにやっていたことができなくなってしまいました。家ぞくで支えていくことが大切だと思いました。私の大好きな甲斐市の特産品の八幡芋も作っていたのですが、この病気がきっかけと、年をとって大変なので作るのをやめてしまいました。私はとてもかなしかったのを覚えています。でもおじいちゃんのふたんになっていたのならしかたないなと思いました。今ではすっかり元気になって、今までのように畑しごとやっていますが、5月の田植えや10月のいねかりは私も手伝っています。おじいちゃんのお米はおいしいので毎年楽しみです。

夏休みはじまってすぐにお母さんと料理教

室へ行き、そこから料理ににきょうみがでて、おじいちゃんのピーマンと玉ねぎを使って30個のピーマンの肉づめを作りました。おじいちゃんおばあちゃんにも食べてもらい、「すごくおいしかったよ」とニコニコで言ってもらえてうれしかったです。この前は、私のひざよりも長い大きな大きな大根がとれた時は、みんなで大わらいしました。虫がにがてで、こわい時もあるけど、お母さんは「食育だねー。おじいちゃんに感しゃしないとね。」とよく言います。おじいちゃんが、元気になって毎日やさいを作ってくれるおかげだと思います。これからもお手伝いをたくさんしたいです。おじいちゃん、おばあちゃんにいつまでも元気でいてもらいたいとあらためて思いました。

優秀

「ちょうちょになったおばあちゃん」

双葉西小学校 二年 小松 楓歩

きょ年の九月に、おばあちゃんがなくなりました。とつぜん学校にれんらくがあって早くかえることになってなくなったことを知りました。とつぜんでしんじられない気持ちでした。おそうしきがおわっても、ずっとさみしい気持ちがつづきました。

そんなある日、にわにちょうちょがとんでいるを見つけました。その黒いちょうちょは、まいにちにわにくるようになり、すこしふしぎな気持ちになりました。そのことを、おかあさんに話してみると「あのちょうちょは、きとおばあちゃんなんだよ。かほのことがしんぱいで見に来たんだよ。」と言いま

した。とても、びっくりしました。それから、
うんどう会するときやピアノのはっぴょう会で
むずかしい曲をひくとき、できたのはちょう
ちょになったおばあちゃんが見てくれていた
からなんだとおもいました。それから、しば
らくしてちょうちょは来なくなってしまいま
したが、きっとどこかで見えてくれるとお
もったら、がんばれるような気がします。家
ぞくがなくなったのは、はじめてで、とても
かなしいことだと知りました。こんどあのち
ょうようが来たら、がんばっているところを
見せたいと思います。そして、おばあちゃん
ありがとう、がんばるからずっと見ていてね
って言いたいです。

作文の部 作品 小学校高学年

(作文は原文のまま掲載しています)

最優秀

「家族って最高」

敷島小学校 五年 窪田 颯陽

「あーまた始まった。」いつも決まってぼくが思う事だ。

それは何かというと、妹達のケンカだ。ぼくには二人の妹がいる。上の妹はやさしくて何でもやってくれるしっかり者で、手伝いや下の妹の面どうを見てくれる。むしろ兄のぼくよりもしっかりしていると思うほどだ。そして、スポーツ万能でおしゃべりな下の妹。末っ子という事もあり、気が強くてわがままだ。

そんな二人は仲が良い時は、いつもくっついて一緒に遊んでいる。もちろんぼくも一緒に遊ぶのだが、女同士きずなは違うようだ。

だが、その時は突然やってくる。試合開始の合図のように、怒りのベルが聞こえるのだ。「あー今日もか」と思いながらぼくは止めに入るのだが、いつ間にかまき込まれ、ぼくまでもケンカの仲間入りに...。「あーやってしまった」と気づいた時にはおそく、みんなまとめてしかられるはめに。

今考えると何でケンカをしていたのかもわすれ、気づいたらいつものように仲良しになっていた。仲直りしたわけでもないのに、兄妹って不思議だ。

そんなぼく達兄妹は、ケンカをする事ばかりではない。良い意味でコミュニケーションを取る事も多く、食たくをかこみながらみんなで楽しく会話をしている。「今日の給食○

○がおいしかったね」「ジャンケンに勝っておかわりをもらった」など給食についての話や、「今日休み時間何してた?」「私はみんなでおにごっこしてたよ」「そういえば会ったよね」など学校であった話でもり上がることが多い。会話がはずみすぎて「先にご飯食べてちょうだい」と言われることも多いが、ぼくはこの時間が好きだ。みんなでくだらない話をする。当たり前前の事だが当たり前前の事こそが幸せなんだと思う。

夏休みになり、妹達は児童館へ行きぼくは一人で留守番をする。

「あーやっとな静かになって良かった」と一人を楽しんでいるが、「今何をしているかな?」とついつい気になってしまう。うるさいと思っていたはずなのに、静かになると何だかさみしくなる。

ぼくはなんだかんだお兄ちゃんなんだなー。いろいろがまんすることが多く、「お兄ちゃんになんてなりたくてなったんじゃないのに」「一人っ子の方が良かった」と前は思うこともあったが、今は一人よりもみんなでする方が何倍も楽しいと感じる。

「早く帰って来ないかな」とちょぴり待ち通しい時もあるが、「いやまだ帰って来ない方が幸せかも」と複雑な気分になりながら、妹たちの帰りを待っている。

いつも思う事は、「毎日が楽しいってこと」これって本当に幸せな事だと思う。

一人よりも二人。二人よりも三人。幸せの数はどんどんふえていく。それに気づかせてくれたのは、兄妹のおかげ。

「産まれてきてくれて、ありがとう。」

「ぼくをお兄ちゃんにしてくれてありがとう。」

家族って本当に最高だ。

優秀

「私にできること」

竜王小学校 六年 高橋 柚來

昨年の12月に私の母は大きな病気になりました。そして、その病気を治すために、半年の間に大きな手術を2回も受けました。大好きだったおじいちゃんが病気で亡くなっているの、母が病気になったと聞いた時には、とても不安で心配になりました。母は元気で見ただけでは、どこがわるいのか外からはわかりません。手術の直前までは仕事もふつうにしていました。

母が入院した病院は15さい未満の子供は、お見まいには入ることができません。だから電話やメールで毎日れんらくをしました。退院をしても手術したきずがすごい、いたいと言っていました。それに手術の影きょうでうでが上がりなくなっていました。しかも手の力がよわくなって、おもいものをもったりするのが大変になっていました。

退院後に、お風呂でかみの毛を洗って手伝いました。その後に「気持ちよかったよ」って言うてくれてうれしくなりました。

その後、病気を治すためのくすりをのむようになりました。のんでいたくすりの副作用で体調がわるい日が多くなりました。立っているのもつらそうな時もありました。私はなにかてつだえることはないかなと考えた時に料理ということを思いつきました。私はもとも料理が好きだったこともあって、「これ

ならできる!」と思ったので進んで手伝うようになりました。一緒に作ったりすることもあるれば、一人で作ることもあります。好きなことだと手伝いでも楽しくできることができました。

しばらくして再び入院し手術をしました。1回目よりもきずが大きくていたそうにしていました。動くのをたいへんそうにしていました。私は買い物へ行った時は荷物をはこんだりするのは自分の係だと思っているのでせつきよくてきにはこんだりしています。

元気な私はなんともなく簡単に出来ることも母はとても大変そうにしていました。いままでは、私はしゅくだいの後もゴロゴロして好きなことをして過ごしていましたが、今では出来ることを見つけて手伝いをして出来ることをふやしています。私が手伝うと母がよろこんでくれます。よろこんでいるのを見ると自分もうれしくなります。なので手伝いをこれからもしていこうと思いました。

家族が病気になって思ったことは、母が病気で大変だけど、昔は今とちがってできることがすくなかったけど今は母が病気になって自分がやらないといけないことが多くなって昔とくらべたら生活が変わったなあっとかんじてます。自分からしたら簡単なことも、母がやると時間がかかっていたりして大変そうにしています。手術がおわっても母はまだまだ大変そうにしています。

私が思ったことは、大変な時こそ、私に出来ることはなにかなって考え自分でできることを自分でして、大変そうな時は手伝いをして支えていくことが大切だと思いました。

私にできること、それは大変な時こそたすけあって、少しでも家族みんな笑顔ですごせるように、すすんで手伝いをし、支えていく

ことです。

優秀

「手をとって」

竜王小学校 六年 大内 星奈

近所のバス停に、車いすに乗った男の人を見かけます。ある時は、右手につえをついた女の人が横断歩道をわたっています。その他にも、おしぐるまをひいているおばあさんや白いつえを持ったお兄さんも見かけます。町に出るとそうした体の不自由な人や高齢者に出会うことがあります。もし、その人たちが困っていた時、私はすぐかけよって声をかけることが出来るだろうか。そんなことを自問自答してしまいます。

私の両親は、体になんらかの不自由さをかかえている人を助ける仕事をしています。ある日、母は家で手話を勉強していました。なぜかと聞くと、「耳の聞こえない人を担当するから」と、教えてくれました。私は、「紙に書いて話をしたらいいんじゃないの？」と、提案しました。すると母は、「もちろんそうなんだけどね。その人はきっと不安の中来てくれると思うの。だからね、みんなが言葉でしゃべるように、その人は手話を使っているのであれば、少しでも同じようにコミュニケーションがとれたら安心するんじゃないかなと思うんだ。」そういいながら、一生懸命勉強していました。そんな母の姿を見た私は、よりそう、という事を知りました。また、家族ででかけた時に、つえをついたおばあさんを見かけました。少しふらふらしていたので、父はすぐにおばさんの所に向けより、「大丈夫ですか？」と声をかけました。するとおば

あさんは、少しおどろいた様子で「ありがとうございます。大丈夫です。」とうれしそうに答えました。

私は、母のように個人を尊重し、他人のためによりそえるか自信がありません。父のように知らない人を、すぐに助けることが出来ず、ただただ見守ることしか出来ません。一人では、やっぱり恥かしくて声をかけられないけれど地域の一人一人がもっと周りを見て色々なことに気がつくことが出来たら、住みよい地域になると思います。

私の将来の夢は、看護師になることです。そう思えたのは、両親の背中を見たからです。でも私には、まだたりないものがあります。それは「勇気」です。それをこくふくしていくために、私の周りの人に優しくなれるような人間になろうと思います。そして、少しずつでもいいから助けが必要な人に声をかける自信をつけていきたいと思っています。

作文の部 作品 中学校

(作文は原文のまま掲載しています)

最優秀

「家族が教えてくれたこと」

双葉中学校 一年 長田 真緒

私に摂食障害という診断が下されたのは、今年に入ってすぐのことだった。摂食障害とは、極端な食事制限をしてしまったり、食べたものを意図的に吐いてしまったり、「太る事が怖い」や「やせたい」という強い気持ちから体重を減らすための行動を取ってしまう病気のことである。摂食障害と一言と言っても、この病気には人によって様々な症状が見られ、私は神経性やせ症と診断された。

この病気を知ったとき、私は大いに驚かされた。加えて動揺もした。自分は減量をしているつもりであっても、無意識に、病的な行動へ走って行ってしまっていたからだ。最初は食事制限が病気と診断されることは、大袈裟なのではないかと感じていたため、あまり気に留めることはなかった。しかし、減量が続けていくにつれ、私は心身の異変に気がついていった。体力は明らかに落ち、少し体を動かすだけで疲れてしまう。常に手先は冷たく、家族からも「顔色が悪い」と、度々心配されていた。人とコミュニケーションを取ることすら苦痛になっていき、精神的にも追い詰められてしまっていた。現行通りでは、肉体的にも精神的にも悪化することは自覚していた。しかし他方では、「食べる」という行為に、未だに恐怖心を抱き、食事量を制限することに安堵感を覚えている自分がいた。このとき、私は自分の行動が異常である

ということに気がついた。

障害と向き合っていこうと思ってからは、極端な食事制限をやめ、少しずつ、食事量を増やしていった。増やすことに今もなお抵抗があったため、食事を楽しめず、日々息苦しさを覚えることは多かった。しかし周りの支援が、私を後押ししてくれた。特に「家族」という存在は私の大きな心の支えとなった。

私に持病があることを知っている人は、極僅かであり、それ以外の人が私を見たとき、「障害者」と理解してもらうことは極めて困難なことだろう。私は、学校でクラスメイトと共に給食を食べることができず、保健室で食事を摂っている。クラスメイトが協力して重たそうに食缶を持っているとき、私は自分一人だけのお弁当を持って歩いている。私はその度に、申し訳ないという気持ちと罪悪感に陥り、摂食障害にさえならなければ迷惑をかけずに済んだのか、と考えさせられた。周りの視線に日々不安を抱く中で、私は、再び学校に登校することが怖くなる日があるのではないかと、懸念していた。

自分に対する負の感情が収まりきらない日々の中で私は食事を摂ることができない日々が続いていた。徐々に口数が少なくなっていく私を見て、心配した母は何度も相談に乗ってくれていた。時に摩擦が生じることもあったが、見離すことなく、最後まで私の障害に向き合ってくれていた。常に明るく振る舞っている父や弟も、相談に乗ることはなかったが、深刻な雰囲気にならないよう普通を装ってくれている、彼らなりの気遣いだった

と思うと、家族の優しさに、何度も助けられてきたことが分かった。振り返ると、私を心配してくれた人は家族だけでなく、学校での友達や先生など数多くいることを改めて思い知った。私は、物事を悪い方向でばかり捉えてしまったが、こんなにも身近に自分を考えてくれている人がいることに、今一度、家族を通して気付くことができた。そう思うと、悪いものとして向き合ってきた摂食障害も、理解して寄り添ってあげるもの、と捉えることが本当の向き合い方だと思えてくる。自分を苦しめている原因は、自分自身の考え方にあるのだと、家族が教えてくれたような気がした。

「ご飯できたよ。」

私は、食を連想させるこの一言に苦手意識を持っていたが、今では母の温かみを感じることのできる、大好きな一言へと変わっていた。私は未だにこの障害で苦悩を抱える日々が続いており、周囲と違う自分を、責めることは多い。しかし最近では、良い部分だけでなく、摂食障害を持っている自分も含め私であると理解し、寄り添えるようになってきている。だからこそ、それを教えてくれた「家族」と共に団らんのできる「食事」という時間を、私は今まで以上に大切にしていきたい。「家族」は未だ食事を摂る事に抵抗がある私に、常に寄り添い、「食」の素晴らしさに気付かせてくれた。私はそのように尽力してくれた「家族」を含めた周りの方に、一日でもこの病気を治し、元気になった姿を見せることが恩返しの為の一つの手段だと考えている。恩を返し、「食」を愛せる時がくるまで、私は日々病気と向き合っていく。そして「家族」という尊い存在を大切にし、共に支え合っ

人生を歩んでいきたい。

優秀

「家庭の日のメッセージ」

玉幡中学校 一年 岡本 ゆな

「もう起きて！朝だよ。」

母の大きな声で我が家は今日も一日が始まる。きりかかった眠たい目をこすりながら枕もとの時計を見ると、家を出る三十分前のいつもの時間だ。

同時にスマートフォンのSNSアプリにメッセージが無いか確認する。友達から重要な連絡や面白い話題が来てないか確認してしまう習慣行為だ。何もないことを確認するともう一度布団の中に顔をうずめる。暫くして二度目の怒号が響く

「遅れるよ早く起きて！」

ビクッとして渋々ベッドから起き上がる。

おぼつかない足取りで階段を下りていくと、私より大分早く起床した母は常に着替えも済まし、小さめのおにぎりをひとつ作って私がすぐに身支度できるように準備してくれている。

先ほどの母の怒号に反応したのか、父も起きて着替えを始めるが、夜更かしの兄は相変わらず寝たままだ。

おにぎりを食べながら何気なくカレンダーを見る。今日は月の第三日曜日、そう家庭の日だ。毎月の第三日曜日が家庭の日であることを、宿題のために調べておいたから間違えない。少し前に家庭の日について家族で話し合い、その日になったら夕飯の時に家族についてみんなで一言ずつ言おうと決めていた。

今日がその日である。今夜何を話そうかなと考えながら洗面所へ向かい、鏡に映ったまだ眠そうな自分の顔を見つめるが何を言えればいいのか思いつかない。

モヤモヤしたまま身支度を終え家を出る。母がいつものかけ声と同時に玄関で見送ってくれる。外では、父が私が乗っていく自転車の状態をペットのチワワと一緒にチェックしてくれている。いやよく見るとチワワはただ遊んでいるだけのようだがいやし効果は抜群だ。家の前の少し進んだところで友達と合流し、宿題の進捗状況や昨晚一緒に楽しんだオンラインゲームの話題をしながら部活へと向かった。そして部活が終わり帰路につく頃には、すっかり今夜の一言の件は忘れていた。家に到着すると両親は、家の掃除や庭の草刈りなどをしている。自転車の片づけのついでに、父がやっている草刈りと花壇の水やりを手伝い、家に入ると汚れた体操着をすぐに母が洗濯してくれる。兄も起きており一緒にお昼ご飯を食べた。

午後から宿題を片づけてしまおうと思い早速取りかかったが、数学問題でわからない所があったので断念し、気分転換にスマートフォンのゲームを始めてしまう。ところがこちらでもゲーム内の強敵が倒せず宿題同様に諦めかけていた。

今日はいまいかないなと考えていると、昼食を終えテレビを見ていた兄が声をかけた。ゲームが行き詰っていることを話すと攻略について色々教えてくれ、兄の助けを得て二人で攻略することに成功し、その後とても気分がよくなった。ゲームを攻略した勢いで断念していた数学の問題を兄に相談したところ、こちらでも無事成功した。

ああ、なんていい日だ、今日はいまいか。これで夕飯後はゆっくり友達とゲーム三昧だ。あっ！そうだと「夕飯」の響きに今朝から考えていた家庭の日の一言の件を思い出した。

今夜何を言おう。と辺りを見回しながら、今日の出来事を思い出してみる。家族に助けられ、協力することで一日が楽しく過ごせた。もっと以前の日のことを思い出してみたが、毎日がその連続だと思った。何気なく過ごしている日々は、未来がよりいい結果となるため、私はいつも家族に助けられている。私もその一員としてもっと協力できたらいいなと思いつつ、近くにあった化粧箱の鏡に映る自分の顔が少し赤くなった気がした。

その時、今日の家庭の日に私が家族に向けて話す一言はこれにしようと決めた。「家庭の日」それは家族への日々の感謝の気持ちを伝える大切な日。お母さんいつもありがとう、お父さんお疲れ様、お兄ちゃんナイスと！。

優秀

「改めて気づく」

竜王北中学校 一年 保坂 音葉

四月から中学校に入学し、環境が大きく変化したと実感する。日々の学校生活が変化することは想像していたが、夏休みもそうであった。部活動で登校する日も多いが、課題やテスト勉強に追われる時間も多く、家にいても一人だけ机に向かわなければならない。小学生の時のように、家で家族とのんびり過ごす夏休みではなくなった。昨年母から、「家族と過ごす時間も大切だけれど、自分一人で

過ごす時間も増えてくると思うよ。勉強が忙しくなるだけではなく、思春期に入ると一人で考えることも増えたり、自分のペースで過ごしたりしたいと思うようになるかもしれないよ。」と言われたことを思い出す。確かに、一人で過ごす時間が自然と増え、その時間も大切にしているが、それでも家族という時間はやはり楽しい。小学生の弟は父や母とリビングで過ごす時間が多く、三人の話し声や笑い声を自分の部屋で聞いていると少し寂しい気持ちにもなる。

昨年までは休日に外出する時は、お弁当を持って、一日のんびり過ごせる場所を選ぶことが多かった。しかし、今は休日にも部活動があり、外出できる時間が限られているため、行き先も限定されてしまう。しかし、それでも家族と一緒に外出することは楽しみな時間である。外出先は限られてしまうようになったが、楽しみは行き先や目的地ではなく、移動中の家族の会話である。普段、父と母は仕事をしているため、帰宅すると家事に時間をとられ、のんびりと話をする時間があまりない。それに比べ、移動中はいろんな話をすることができる。車中では弟のリクエストで、クイズやゲームをすることもある。普段ゆっくりと話せない分、みんなで笑いながら過ごす。また、学校の出来事や部活のことを話していると、自然に家族全員で盛り上がってくる。

私にとって「家族って何だろう」と、この作文を書きながら考えたときに、すぐに思い出す出来事があった。それは、四月から入部した吹奏楽部でのことだ。コンクールの練習をはじめて間もない頃、顧問の先生から「ピアノを習っていて楽譜も読めるし、リズム感

も良いから、担当楽器ではないが、パーカッション担当として課題曲に挑戦してみないか。」と勧められた。一年生がコンクールに出ることはあまりないと聞いていたため、参加できる可能性があるを知り、私は嬉しくなった。しかし、取り組んでみると当然難しく、毎日練習に追われた。一週間が過ぎた頃、外部講師の先生は時間をかけて練習に付き添って下さった。わからないところも教えていただき、少し不安が減ったが、悩んでいる私の表情を見て、今の気持ちをきかれた。少し難しいと答えると、「できないと思うなら、やめた方がいいよ」と言われた。頑張っただけ練習していたことを否定されたような気持ちになり、とても悔しい気持ちになった。家に帰って、自分の気持ちを話していくうちに涙も出てきた。両親は最後まで話を聞いてくれて、アドバイスもくれた。「悔しさを力に変えればいい」と言われ、やる気のスイッチ、背中をおされた気がした。しかし、それでもまだ気持ちの整理がつかずに悩んでいると、静かにそばにいてくれた。気分転換になるのではないかと、私の好きなお店にも連れていってくれた。だんだんと気持ちの切り替えもできて、それから迷うことなく練習に明け暮れた。練習の甲斐あってか、コンクールでは、納得のいく演奏ができた。アドバイスをもらえなかったら、諦めていたかもしれないし、納得のいく演奏もできなかったかもしれない。家族の支えがあったからこそ、私はコンクールのステージに立てたと思う。そして、コンクールが終わった時に、父から小学生での吹奏楽部を勧められなかった理由を初めて聞いた。私は小さい頃からピアノと書道を習っていた。二つの習い事とも家での練習も欠かす

ことができず、それだけでも時間的にも気持ち的にも余裕はなかった。そのため、それぞれが中途半端になってしまうと心配しての決断だったそうだ。確かに、今の私にはあまりゆとりはない。小学校の頃から吹奏楽に入部していたと思うと、おそらく気持ちが参っていたかもしれない。父は、私の性格を知っていただけに、入部を勧められなかったのだと思った。しかし、その時は私の気持ちを受け入れてもらえず、冷たい対応に聞こえたが、今では感謝している。目に見える優しさではなく、先を見越した優しさだったのであったと後から気づいた。

家族の支えは共に過ごす時間、話を聞いてくれる関係、先を見通してのアドバイスなど、後になって気づくことが多い。しかし、喧嘩すること多いが、いつもふざけて話しかけてくれる弟もいて、私の気持ちを楽しんでくれる存在であることにも改めて気づく。

標語の部 作品

【小学校低学年】

最優秀

おはようは みんなの元気を 知るあかし

敷島小学校 3年 米本 美玖

優秀

みんなのぎゅーで ぼくのじゅうでん 100 ぱーせんと

竜王小学校 1年 小林 旺雅

パパとママ スマホ見ないで ぼくを見て

竜王小学校 2年 吉田 頼二

【小学校高学年】

最優秀

おはようと 言える今日を 大切に

敷島南小学校 4年 名取 美湖

優秀

なぜだろう やっぱりおちつく 家のにおい

竜王小学校 4年 保坂 界翔

お弁当 つたわる伝われ 母の愛

双葉東小学校 5年 清水 菜帆

【中学校】

最優秀

家族との 時間は私の エネルギー

敷島中学校 3年 富山 紗希

優秀

おかえりの たった一言 ほっとする

竜王中学校 1年 青柳 咲那

反抗期 ママの弁当 身にしみる

敷島中学校 3年 池谷 心音

ポスターの部

小学校低学年



【最優秀賞】
玉幡小学校 3年
花輪 環那



【優秀賞】
竜王南小学校 3年
小林 篤史



【優秀賞】
竜王東小学校 3年
上野 由莉

小学校高学年



【最優秀賞】
敷島南小学校 6年
大堀 今日香



【優秀賞】
双葉東小学校 5年
田辺 奏太



【優秀賞】
双葉西小学校 5年
生山 蘭夏

中学生



【最優秀賞】
敷島中学校 1年
相原 真央



【優秀賞】
敷島中学校 1年
古屋 伶果



【優秀賞】
敷島中学校 1年
向山 煌生